

「靈山」英彦山

はじめに

英彦山は古来神仏が宿る山であった。太陽神である天照大神の子、天忍穗耳命が英彦山北岳に天下ったという伝承があり、日の子の山、すなわち日子山と呼ばれた。やがて「彦山」と書くよ



うになり、江戸時代の享保14年(1729年)には靈元法皇より「英彦山」と表記するよう勅許を賜った。また、「英彦山三千八百坊」という言い方も残っている。これは英彦山の山内に八百の坊舎があり、三千人の人々が住んでいたという意味である。英彦山は山形県の出羽三山、奈良県の大峰山と並ぶ日本三大修験道場とされていた。

こうした由緒ある英彦山とはどういう山であるのか、様々な方面から説明をしていきたい。

1 英彦山の概要

英彦山は福岡県と大分県の県境にそびえている。旧国名で言えば筑前国、豊前国、豊後国の三国にまたがっている山城である。詳しい歴史は後で述べるが、英彦山神宮の前身、英彦山靈仙寺は鎌倉時代には七里四方(一辺約30km四方)に及ぶ広大な領地(寺領)を持っていた。江戸時代になると寺領は削られたが、山頂から半径5km程度の地域は英彦山領であった。そのため現在でも福岡県、大分県の英彦山付近は県境未定地域となっている。

また英彦山は巨大な分水嶺でもあり、福岡県側の北斜面に降った雨は遠賀川となって玄界灘に、あるいは今川となって周防灘に注ぎ、大分県側の南斜面に降った雨は筑後川となって有明海に、あるいは山国川となって周防灘に注いでいる。

山容の概略を言えば、北斜面は比較的なだらかであるが、南斜面は急峻で生活に適さない。従って、古来集落は北斜面に集中し、南側は裏英彦山と呼ばれて人跡のまばらな地域である。東は鷹ノ巣山を経て犬が岳、求菩提山へ、西は岳滅鬼山、釈迦ヶ岳と千メートル程度の山並みが連なっている。

北九州から英彦山に向かうと田川市に入った辺りから、地平線に英彦山三峰が突出し、その左手に鷹ノ巣山の三つの突起が並んだ印象的な景観が現れてくる。この特異な山容から、昔の人々は英彦山を神宿る地として崇拜し信仰の聖地とした。英彦山では、聖なる地域と俗なる地域は、四土結界と呼ばれた目に見えない線で区別されていた。聖なる地域では信仰や修行以外の人間の営みは禁止され、田畑をすることもできなかった。結界の下の地域は「英」の文字をつけずに「彦山」と表記し、結界から上の地域は「英彦山」と表記していた。その名残は今でも残っていて、彦山川や彦山駅は「英」の字をつけずに表記する。下の地域には、北坂本、南坂本、唐ヶ谷などの集落がある。これらの集落は結界から上に住む人々の食糧や生活必需品の補給基地として重要な役割を担っていた。

国道500号線に沿って上っていくと銅鳥居に着く。ここから上が、かつての聖なる地域で、英彦山神宮の正殿奉幣殿まで約1キロの参道「桜の馬場」が一直線に上っている。また、参道の右手には2005年(平成17年)に開通したスロープカーが通っている。参道の両側には、昔は坊舎と呼ばれる神道・仏教・修験道の宗教施設が集中し、英彦山信仰の中心地であった。明治初期の「坊中屋敷図」によると参道の右側に二筋、左側に二筋の通りが並行し、百を超える坊舎が立ち並んでいた。江戸時代にはも

っと多くの坊舎がひしめいていたという。明治時代になって坊舎はさびれ、禁制も消滅してほとんどの坊舎跡が水田になったが、現在は過疎の影響で稲作をする人がいなくなり、草が生い茂った平地だけが夢の跡のように残っている。

参道の中程に土産物店が向かい合っているところがあるが、この場所は江戸時代に豊前小倉藩主の小笠原氏が作った「彦山町」と呼ばれる場所で、英彦山の中で唯一土産物の販売や歌舞音曲が許された地域であった。この彦山町は、伊勢神宮の「おかげ横丁」のような機能を持っていた。その伝統を継いで、昭和の頃は8軒の旅館が建ち並びたいへんな賑わいであったが、現在営業している旅館はない。

現在英彦山の産業としては林業しか残っていないが、かつては県内有数の観光地だった。昭和30年代には年間の観光客が20万人を越えていたというデータが残っている。しかし時代の流れとともに、人々の関心は派手で豪華な観光地に向かい、神社や古寺、修験道遺跡、山中の古道といった、もの静かで渋い英彦山の味わいは好まれなくなった。だが、最近になって、こうした古いものへの好尚もどりつつあり、マスコミでもしばしば取り上げられている。現在添田町や英彦山神宮を中心として、かつての賑わいを取り戻そうという試みがなされている。大会に参加する方々は、英彦山の山中に静かに眠っている古い文化の香りに、ぜひとも触れていただきたい。

2 山岳と登山道について

英彦山の本体は中岳(1,188m)、北岳(1,192m)、南岳(1,199.5m)の三峰であり、付属するピークとして上仏来山(685m)、黒岩山(878m)、障子ヶ岳(948m)、鹿の角(1,071m)などがある。英彦山の東は鷹ノ巣山に、西は岳滅鬼山へと続いている。鷹ノ巣山は西から一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳という三つのピークからなる。英彦山の溶岩台地が侵食されてできたビュートの山で、国の天然記念物である。最高峰は三ノ岳(990m)で、一ノ岳(979.3m)には三角点がある。また、岳滅鬼山(1,036.7m)は福岡、大分県境にある山で、県境尾根をたどって釈迦ヶ岳、大日岳と山並みが続いている。

国道500号線ができる以前、肥前(長崎、佐賀県)や筑前、筑後(福岡県)からの英彦山詣での旅人は、小石原経由で貝吹き峠を越え、汐井川でみそぎをして身を清めた後、対岸の南坂本に渡り、雲母坂、唐ヶ谷、銅鳥居を経て奉幣殿(当時は英彦山霊仙寺講堂)に参拝した。ここから急な石段を上ると、下宮、中宮、産霊神社を経て中岳山頂の上宮に達する。これは通称「中道」と呼ばれ、古来英彦山の幹線である。

この中道に沿って登ると、三つの結界線を越えて四つの土地を踏んでいくことになる。初めの結界線は銅鳥居で、ここからは凡聖同居土と呼ばれ、俗人・凡人と聖者がともに同居している土地。銅鳥居からは方便浄土と呼ばれ、修行者が住む仮の浄土。「彦山町」の上の石の鳥居を越えると実報莊嚴土と呼ばれ、修行専念の聖域で菩薩界とされた。

さらに産霊神社の上の木鳥居を越えると常寂光土と呼ばれる永遠絶対の浄土、すなわち仏界に至るとされ、唾を吐くことすら禁じられていた。

かつて、産霊神社からは千本杉と呼ばれる杉の巨木の森で、「常寂光土」にふさわしい神秘的な場所であったが、平成3年の台風19号でほとんどの杉が倒れてしまい、現在は白骨化した巨木がまばらに立つ草原地帯になっている。かつての神秘的な森が復活するには数百年の時間が必要であろう。現在中岳山頂では上宮の修復工事が行われており、産霊



現在、修復工事中の上宮

神社より上は立入禁止区域となっている。中岳から北岳を通して高住神社へ、また中岳から南岳を通して鬼杉へと登山道が延びている。

上記の縦の道とは別に、奉幣殿から西へ水平に延びる道がある。それは英彦山西斜面に広がっていた修行場を繋ぐ古道である。また、この道は歴史の項で後述する回峰行の重要な道であった。大きく分けると上の道と下の道の二本になるが、この二つの道に挟まれた地域には、いくつもの窟や奇岩がそびえ、多くの神仏が祀られている。

上の道は奉幣殿から石段を上り右折して入る道で、^{ちむろだに}智室谷に繋がっている。智室谷は江戸時代まで多くの坊舎があった場所で、現在でも坊舎跡の苔むした石垣を見ることができる。智室谷の先で道は二つに分かれ、左に行けば、^{ぼんじいわ}梵字岩、^{しおうじだに}四王寺谷、^{さんこうげ}三呼峠、^{おおみなみ}大南神社を経て鬼杉に至る。これらはいずれも重要な修行の場であった。

智室谷の先の分岐を右に行けば、玉屋谷、玉屋神社に至る。玉屋谷は英彦山の開山伝承がある最も古い修行の場であり、ここにも山伏の坊舎跡が多く残っている。玉屋神社は巨岩の下にはめ込むように拝殿が建てられている。ここは英彦山四十九窟のうちの一つ^{ほんやくつ}般若窟である。この道は玉屋神社からさらに尾根を越えて鬼杉に至る。

下の道は旧英彦山座主院跡（現在は九州大学彦山生物学実験施設）の入口脇から山腹を縫って上仏来山分岐を通り、大きな沢を渡渉した後、尾根を越えて玉屋神社へ至る。この道はかつて座主院の下に広がっていた坊舎や家臣の屋敷と玉屋谷の坊舎間の連絡に使われていた古道である。この道は玉屋谷で上の道と合流している。なお、沢の渡渉後右折すると大南林道の汐井川駐車場に出る。

英彦山は遠賀川の源流の一つであるが、最も奥深く県境付近まで食い込んでいるのは遠賀川水系の汐井川である。この川に沿って大南林道が延びているが、569m 地点で汐井川を渡り黒岩山と障子ヶ岳の間を抜けて岳滅鬼峠へ至る道がある。峠には「従是北豊前國小倉領（是より北、豊前の國小倉領）」と書かれた古い石碑が建っており、この道が日田へ抜ける古道であったことがわかる。岳滅鬼峠から右折すると福岡、大分県境の稜線をたどり、岳滅鬼山を経て^{きりいしとうげ}斫石峠に至る。

今度は目を英彦山北斜面に転じてみよう。英彦山の北斜面は標高800メートル程度のなだらかな高原地帯になっている。この高原の真ん中に「彦山町」から豊前坊高住神社まで参道が延びている。この参道に沿って国道500号線が走っている。現在九州自然歩道になっているこの道を東に行くと、別所谷を抜け、バンガローが建ち並ぶ英彦山野営場を過ぎ、「スキー場」と呼ばれる広い茅原に出る。ここは屋根を葺く茅の供給地として村の入会地であった。参道はスキー場、英彦山青年の家を経て豊前坊高住神社に至る。

なお、スキー場から尾根伝いに中岳に至る道がある。この尾根は北西尾根と呼ばれ、自然林が美しい尾根であるが、現在は上宮工食用資材の運搬用モノレールが設置され、通行することができない。

豊前坊高住神社のさらに東側の薬師峠から、裏英彦



梵字岩



スキー場

山道と呼ばれる道が延びている。この道は英彦山の南東斜面、南斜面を巻いていく道である。ほとんどが原生林に覆われ、動植物も多様で深山幽谷の趣が漂うすばらしい道である。北岳分岐を過ぎ、苔むした岩石地帯といくつかの尾根を越えていくと、ケルンの谷に至る。ここから右折すると中岳と南岳のコルに出る。直進すると鹿の角の下を巻いて鬼杉に至る。

3 大回峰と峰入りについて

今回の登山大会のコースは、いずれも古い歴史を持った修行の古道をたどるルートである。比叡山や熊野古道において、連日山をめぐる回峰修行が行われているのは、テレビなどでもしばしば報じられるが、英彦山でも同様の修行が行われていた。

一つは^{おおめぐりぎょう}大廻行と呼ばれる。これには^{うちめぐりみち}内廻路（^{しょうしゅび}小修尾とも言う）と^{そとめぐりみち}外廻路（^{だいしゅび}大修尾）の二つのコースがある。現在の地名で言えば、前者は奉幣殿→英彦山青年の家→高住神社→鷹ノ巣山（一の鷹巣）→薬師峠→北岳→中岳→南岳→大南神社→梵字岩→玉屋神社→下宮→奉幣殿という約13kmのコースである。このコース内に74の拝礼の場所が設定され、山伏達はここで祈りを捧げながら回峰行を行った。

後者は今となっては不明の箇所もあるが、内廻路のはるか外側をめぐる約30kmのコースであった。この外廻路が江戸時代の英彦山霊仙寺領であったのではないかという説がある。

今ひとつは^{はるみね}春峰、^{なつみね}夏峰、^{あきみね}秋峰と呼ばれた^{さんきにゅうほう}三季入峰である。このうち春峰について詳しく説明してみよう。春峰は2月15日から4月10日の55日間、山岳を巡り歩きながら激しい修行を行った。ルートは今回の大会コースと一部が重なっている。山伏達は、英彦山→岳滅鬼山→釈迦ヶ岳→大日岳→小石原行者杉→馬見山→古処山→大根地山→宝満山というルートをとった（帰りは平地の里道を歩いた）。単に登山をするだけでなく、不眠不休に近い修行を連日行いながら山を歩き、一日に手のひら一杯の米が与えられるだけで体力的にも極限状態に近く、途中で命を落とす者もいた。馬見山に登る途中の栗河内分岐にある「ハンドウ仏」はそうした山伏を葬った塚であり、三季入峰のルート上には何カ所か同様の伝承を持つ塚が今に残っている。古の修行者達が命をかけて修行した古道が今回の大会コースである。

4 英彦山の歴史

英彦山は奈良時代以前から非常に長い歴史を持っており、詳しく述べると途方もない量になってしまう。ここでは、英彦山登山で知っておくとよいと思われる最小限の事項のみを精選して簡潔に述べることにする。

・奈良時代以前

中国北魏の僧^{ぜんしょう}善正やその弟子^{にんにく}忍辱（俗名^{ふじやまこうゆう}藤山恒雄、一説に藤原とも）による開山伝承や、^{えんのおづの}役小角による開山伝承、あるいは宇佐弥勒寺別当の法蓮による中興伝承が伝わっているが、最新の研究によれば、これらの伝承は、英彦山の起源を仏教伝来以前に置きたいという中世（鎌倉、室町時代）の創作と考えられている。しかし、出土品などから奈良時代以前から英彦山が信仰の場であったことがわかっている。モデルとなった人物もいたのかも知れない。

・平安時代

「彦山」（この時代はまだ「英」を付けずに表記）の名が史料に初めて見えるのは、『本朝世紀』の^{かほう}嘉保元年（1094年）の項で、彦山の衆徒（僧兵）が^{ごうそ}大宰府に強訴し、^{ふじわらのながさき}長官の藤原長房は京都に逃げ帰ったという記事である。平安末期は奈良興福寺や比叡山の悪僧が権勢を振るっていたところで、彦山で

もすでに強大な寺院勢力が存在していたことがわかる。また、養和元年（1181年）には後白河法皇によって京都新熊野社の荘園として彦山が指定されている。

・鎌倉、南北朝時代

平安時代以来の本地垂迹説の流行に伴って、彦山南岳は釈迦如来が伊邪那岐命として垂迹した俗体岳、中岳は千手観音が伊邪那美命として垂迹した女体岳、北岳は阿弥陀如来が天忍穂耳命として垂迹した法体岳（仏の形の山）であると考えられるようになった。垂迹とはインドの仏が日本の神の形を取って現れることで、こうした神を権現と呼ぶ。これを彦山三所権現と言ひ、この後長く彦山信仰の基本形となっていく。また鎌倉時代に書かれた『彦山流記』によれば、山腹には靈仙寺があり、これを取り巻く多数の寺院や庵に400人に及ぶ僧侶が修行していた。宗旨は天台宗であったが修験道の修法はまだ記録にない。その領地は七里四方に及び、守護に租税を納めなくてよい権利「不輸権」を保持していた。

南北朝時代の正慶2年（1333年）に後伏見天皇の皇子安仁親王を彦山座主に迎えた。親王は僧となって助有法親王と名乗ったが彦山には住まず、筑前国黒川（現、福岡県朝倉市黒川）に黒川院という御殿を建てた。黒川院は七里四方の西南の隅に位置し、筑前・筑後・肥前との連絡が容易であるため、英彦山の経済的な拠点ではなかったかという説がある。

この助有法親王以来座主は世襲制となり、現在の高千穂宮司家に続いている。この黒川院は江戸時代まで続いた。

・室町、戦国時代

室町時代には彦山の修験道が確立し隆盛期を迎えた。七里四方の寺領を「七里結界」とし、結界内の村々には大行事社（高木神社）を鎮守神として配置した。現在でも地図上に大行事という地名や高木神社を多く確認できるのは、この名残である。山伏達は修験道系の「行者方」、天台仏教系の「衆徒方」、神道系の「惣方」に分かれ、それぞれの神事や仏事を執り行った。修験道で最も重要な入峰（峰入り）も行者方によって春・夏・秋の三季実施されるようになった。また不輸権に加えて不入権も獲得し、北部九州の一大宗教勢力となっていた。

しかし、戦国時代になると佐賀の龍造寺氏や、豊後の大友氏が彦山を己の陣営に取り込もうとし、これを拒んだ彦山側との戦いが起こり、山内は焦土と化した。彦山座主は彦山防衛のため山内に座主院を築き、黒川から移ってきて、代々の住居とした。座主院跡（現在九大生物学実験所）の壮大な石垣に英彦山座主の権勢を偲ぶことができる。

天正15年（1585年）に豊臣秀吉の九州征伐によって九州は平定された。秀吉は七里結界の荘園を没収し、彦山は一時非常に窮乏したが、江戸時代になると徳川幕府によって、不入権や九州一円に檀家を持つことを認められた。また豊前領主となった細川氏、肥前領主の鍋島氏、筑前領主の黒田氏などの庇護を受け、再び繁栄の道を歩み出した。細川忠興は靈仙寺大講堂（現在の奉幣殿）、鍋島直茂は下宮と上宮の拝殿、その子の勝茂は銅鳥居を建立奉納している。



銅鳥居

・江戸時代

彦山は平安時代以来京都^{しょうごいん}聖護院の末寺という扱いであったが、聖護院を相手に訴訟を起こして勝訴し、元禄9年（1696年）に幕府から「天台修験別格本山」として公認された。寛文11年（1671年）には小笠原氏が門前集落のほぼ中央部に町屋30軒の「彦山町」を新設した。宿屋や商家の他、歌舞伎小屋まであり、参拝客の息抜きの場としてたいへん賑わったという。宝永年間（1704~1711年）に彦山の人口は最高に達した。坊舎や庵室の数は557、僧俗併せた総人口は3015人という記録が残っている。

享保14年（1729年）には霊元法皇より「英」の字を賜り、以後英彦山と表記するようになった。この頃が英彦山の最も栄えた時期である。

・明治時代~現代

幕末の混乱期には、長州藩に加担する尊皇派の山伏と、小倉藩に加担する佐幕派の山伏に別れて抗争が起きた。小倉藩は英彦山を襲撃して尊皇派の山伏を捕らえ、投獄や斬首を行って弾圧した。現在庭園跡のみが残る政所坊なども、この時に当主が逮捕・処刑されて断絶した坊である。やがて明治新政府が成立すると尊皇派の山伏はその報復を行った。同時にその一部は神兵隊という狂信的な結社を作り、過激な^{はいぶつきしやく}廃仏毀釈運動を起こした。これによって山内にある仏像、仏具、経本など、あらゆる仏教的なものが破壊され焼却された。大講堂（現在の奉幣殿）にも火を掛けるところだったが、山火事を恐れて思いとどまったという。

この争いに加えて、明治元年（1868年）の「神仏分離令」と明治5年の「修験道廃止令」によって山伏達は生活の糧を失い、英彦山修験道は壊滅的な打撃を受け、山伏や僧侶を辞めて山を下る者が相次いだ。坊舎は壊されて田畑となっていった。

英彦山霊仙寺は明治4年に国幣小社英彦山神社、同30年に官幣中社となり、昭和50年（1975年）に英彦山神宮となった。

英彦山が賑わいを取りもどしたのは、昭和10年代に始まった産業安全祈願祭である。英彦山の北麓には筑豊炭田が広がり、その北側には北九州工業地帯があった。昭和11年の鉱山安全大祈願祭を初めとして年々規模が拡大し、福岡県知事も出席する盛大な祈願祭となった。しかし戦後のエネルギー革命によって炭鉱では閉山が続き、北九州の工業地帯もかつての勢いは消え、現在では祈願祭の規模は縮小されている。

また戦後一時期は、福岡や北九州の都市圏から近い観光地として賑わったが、しだいに客足が遠のいていったのは先述したとおりである。

おそらく長い歴史を通して、英彦山の人口が最も減少した時代は今この時であろう。今後の英彦山がどのような歴史的展開を見せるのか、今のところ誰にもわからない。しかし人間の営みは消えても、悠久の山河は昔のままの姿を我々に見せてくれる。英彦山の山に分け入り、心を澄ませてみてほしい。きっと先人達が感得した神の息吹を感じ取ることができるだろう。今大会で、深い森や暗い岩窟を見て遠い昔に思いをはせ、英彦山の明るい未来を祈っていただければ幸いである。

2 大会コースのルートガイド 太字下線は主要地点

1日目：英彦山青年の家から北岳（メインザック 隊行動）

英彦山青年の家から九州自然歩道に入り左へ進む。国道500号線に「63カーブ」のところで出たら、その車道を右へと進む。車道の脇にはシカが嫌うナガバヤブマオやマツカゼソウが年々増えている。ほどなく豊前坊につき、右斜め上へと石畳の参道があるので、それを登ると豊前坊（高住神社）につく。社殿脇より登山道が続いているので、それを進んでいく。途中砂防ダムを乗り越え、さらに進むと凝灰角礫岩



高住神社の参道を上がる

でできた岩石群があり、400万年前の火山活動の跡がうかがえる。またこの辺りには、ヒノキ、ツクシシャクナゲ、ゲンカイツツジ、イワタバコ、イワギボウシなどが生育している。さらに進むと望雲台分岐があり、これを左へ行くと断崖絶壁で景色のいい望雲台へと行けるが、今回は右へと進もう。この辺りから上は立派なシオジの林になっている。林床にはミヤマクマワラビを伴い、高木層にはシオジの他にサワグルミ、ミズメなど、低木層にはヒコサンヒメジャラ、ヒナウチワカエデなどが生育している。登りとしては、ちょっとトラバース気味に緩やかな部分もあるが、大部分は直登で急な登りが続く。急ではあるが、ほとんどが石段で足場はしっかりしている。ただし、時折浮石があるうえに、雨などで濡れているときは滑りやすいので気を付けてもらいたい。また、「救世安民」と刻まれた石碑を過ぎ、溶岩の壁を過ぎたあたりからは少し足場が悪くなり、このあたりは特に落石させないように十分に気を付けよう。木でできた階段が現れ、これを登りきるといわゆる一本杉と呼ばれている鞍部に出る。登ってきた階段を振り返ると、左下には歩き始めた英彦山青年の家も見える。この鞍部を右へと進むと、岩場を登るところに出くわす。ロープと梯子の2本の道がつけてあるが、いずれにせよ滑落には気を付けてもらいたい。岩場の上には橋がかけられてあり、歩きやすくなっているが、またすぐに木の根をつかんで登るようなところも出てくる。この辺りの植生はブナやオオカメノキ、ツゲが特に目立っている。緩やかな尾根に上がってくるとまもなく北岳に着く。ピーク周辺は神仏習合時代からの聖域となっており、足を踏み入れることはできないので気を付けて休憩してもらいたい。休憩したらあとは来た道に戻るのみで、一本杉、望雲台分岐、豊前坊を経て英彦山青年の家に戻ることになる。

2日目：岳滅鬼山コース（サブザック 隊行動、チーム行動）

英彦山青年の家から左が豊前坊、右が鷹巣原高原の状態ですぐに進む。すぐにバードライン分岐があるが、現在上宮の工事のため通行禁止となっている。その分岐を通り過ぎ、樹林帯を抜けると、左側にススキの草原である鷹巣原高原が開ける。さらに進むと英彦山野営場を通過し、鷹巣原駐車場へと向かう。ここまでが隊行動である。ここからチーム行動になるので、間違えないように行ってもらいたい。鷹巣原駐車場を出てまっすぐ進むと丁字路になっているので、これを左の奉幣殿へ進む。鷹巣高原ホテルを通過するとミツマタの群生やヤブツバキが見られる。車道を横断し左の尾根側に向かって進んでいく。しばらく登山道を進むと英彦山修験道館と呼ばれる大きな建物が現れる。ここを通過するとすぐに奉幣殿に到着する。

ここには天ノ水分神と呼ばれる湧水や英彦山ヒメシヤラ・シャクナゲ、また、スロープカーの終点でもあり一般の参拝者も多い。左側の階段を登り直進が英彦山上宮、右折が鬼杉の分岐を右に進む。この区間はスギの植林地帯である。20分ほど進むと三呼峠分岐となり、まっすぐが玉屋神社、左が^{おおみなみ}大南神社方面で、今回はまっすぐ進む。峠を越え、下っていくと玉屋神社に出る。玉屋神社からさらに少し下ると三叉路になっているので、これを右手前方向へ曲がり、林道跡を下っていく。大南林道と出会ったところが汐井川渡渉点である。ここを気を付けて対岸へ渡ると、登山道が続いているので、これを登っていこう。途中、林道の跡と思われるところや橋台の跡などが見られる。再び大南林道と出会ったところが、深倉分岐である。

この深倉分岐は林道と山道が交差している四つ角となっているが、まっすぐ岳滅鬼峠へと進む。ここから登っていくと壊れた小屋が現れるのですぐ横を通過して左側へと進む。登山道を注意して進むと岳滅鬼山登山口の看板がありここから右側の登山道へと進む。

20分ほど登ると岳滅鬼峠に到着する。ここから左は石楠花の頭、右は岳滅鬼山方面となり右へ進む。ここから尾根ルートはブナの自然林やシャクナゲの群生のなか進んでいく。途中三か所ロープやハシゴが現れるので、軍手をつけて浮石や落石、踏み外しに注意して進んで行こう。最初はハシゴが設置されている。ここは長い距離ではないので前の人がハシゴを通過したのを確認して登り始めてほしい。2番目は長いロープになっている。ロープを使わなくても足場を確保しながら登ることができるが、急にロープをもって体重をかけると他の人に危険が及ぼす可能性があるため、ロープを持つ場合は周りに声をかけて欲しい。右側の木々の間にもルートができています。最後の難所はロープとハシゴの組み合わせになっている。上のハシゴで停滞すると下のロープの途中で待機することになるので上の状況をよく見ながら確認して進む。ハシゴを通過した後も石が崩れやすくなっているため注意しながら進む。ここを通過するとシャクナゲの群生となり岳滅鬼岳に到着する。山頂を通過し下っていくとシャクナゲとその林床にツルシキミの群生がある。前方の視界が開けると目の前に岳滅鬼山が見える。ススキの草原を登りきると岳滅鬼山に到着する。北に福智山、南にくじゅう、東に由布岳と展望が開けている。



三国境

岳滅鬼山を越えて尾根伝いにさらに進む。左に伸びている尾根に入ったりしないよう気を付けながらテープなどを頼りに進んで行くと、^{さんごく}三国境に着く。ここは現在、福岡県と大分県の県境に過ぎないが、旧国名では、筑前、豊前、豊後の三国の境であったのである。これを左に行くと浅間山の方に下って行ってしまうので、右の尾根の方に進路をとる。深倉越を通過ししばらく進むと^{ほうしゅやま}宝珠山に着く。ここは右の尾根に行かないよう注意して左の方に進む。さらにアップダウンを繰り返しながら尾根伝いに進んで行くと、釈迦ヶ岳分岐に着く。ここから標高40mを登れば釈迦ヶ岳であるが、これを左手前に曲がってスギの植林地帯を下っていく。途中、25,000分の1地形図の道とずれている部分があるが、テープなどの道標がついているので、そちらを進んでほしい。釈迦ヶ岳から下ってきた道と合流してすぐに左に下る道がついているので、これを下りきるとゴールの砺石峠に到着する。



砺石峠

3 荒天対策

11月3日に起こった場合

	地震（震度5弱以上）	台風・気象警報以上	大雨注意報 雷注意報発表時
11月3日	大会中止 早期帰還準備	宿泊所待機 行動中止	通常行動
11月4日	帰宅完了	通常行動	通常行動

11月4日に起こった場合

	地震（震度5弱以上）	台風・気象警報以上	大雨注意報 雷注意報発表時
11月4日	大会中止 早期帰還準備	行動中止 早期帰還準備	通常行動



英彦山神宮 奉幣殿